

「ひきこもり」支援としての国際交流の効果 —海外での自然体験活動を事例に—

人間文化課程社会コース 1255039

藤掛洋子研究室所属 神谷結香

本論文では、「ひきこもり」支援の1つの方法としての国際交流の効果について、海外での自然体験活動を事例に分析した。筆者やまわりの友人の中で国際交流による自己の価値観の拡大や考え方の変容が感じられるものの、ひきこもり支援の中で国際交流の支援方法を実施している機関が少ないためである。具体的には、文献調査によるひきこもりの実態調査と、ヒアリング調査による国際交流の効果の検証を行った。

文献調査では、斉藤(1998)や内閣府を始めとするひきこもりの定義を挙げたうえで、ひきこもり状態にある人数、ひきこもり状態であることの諸問題を挙げ、支援する意義を見出した。そして、近年示されたヨーロッパでのひきこもりの例を挙げることで、それぞれのひきこもりになった原因の違いから、日本特有の「ルール(古橋:2014)」という社会常識を認識することができた。これにより、ひきこもり状態にある人の国際交流の効果を当事者の視点から明らかにすることの有意性が指摘された。

ヒアリング調査では海外での自然体験活動を行っているNPO法人Tセンターの事例を挙げた。当事者へのアンケートとインタビューによって、海外での自然体験活動に参加した当事者たちは、高校以前の不登校からつながるひきこもりのタイプであり、参加前から外出行動が行われていることが明らかになった。また、海外での自然体験活動の効果は「新しい価値観を感じ、視野が広がる」という「生きる意欲の回復」につながるものであるということが明らかになった。

これらを踏まえて、ひきこもり支援としての国際交流はヒアリング調査を行った当事者の中では「海外で新しい価値観を感じ、日本の「ルール」とは異なった視野が広がることで、生きる意欲の回復につながっている」という効果があることがわかった。また、今回国際交流の事例として挙げた海外での自然体験活動はD先生などの支援者の関わりが不可欠であることと、渡航中の国際交流だけではなく、渡航前後のフォローなどで様々な方法がとられることにより、当事者それぞれにあったきっかけが生み出され、社会復帰する可能性を高めることが明らかになった。

【参考文献】

斉藤環(1998)「社会的ひきこもり 終わらない思春期」PHP 研究所

古橋忠晃(2014)「第4章 フランスと日本の「ひきこもり」の心的構造」『「ひきこもり」に何を見るか グローバル化する社会と孤立する個人』青土社